

姥ざかり 花の旅笠

——
小田宅子の「東路日記」

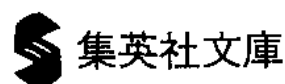
おだいえこ

あずまのにつき



田辺聖子

集英社文庫



うば 姥ざかり 花の 旅 笠 小田 宅子 の 「東路 日記」

2004年 1 月25日 第 1 刷

定価はカバーに表示してあります。

著 者 田 辺 聖 子

発行者 谷 山 尚 義

発行所 株式 集 英 社
会社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-8050

(3230) 6095 (編集)

電話 03 (3230) 6393 (販売)

(3230) 6080 (制作)

印 刷 大日本印刷株式会社

製 本 大日本印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

江苏工业学院图书馆

集英社蔵

姥か花の旅笠
小畑宅子の「東路日記」

田辺聖子



集英社版

この作品は二〇〇一年六月、集英社より刊行されました。

姥ざかり花の旅笠

小田宅子の「東路日記」……目次

足も軽かれ

天気もよかれ……………9

玉くしげ

二見の浦波……………104

後の世たのむ

善光寺さん……………144

二荒の早蕨……………235

お江戸・

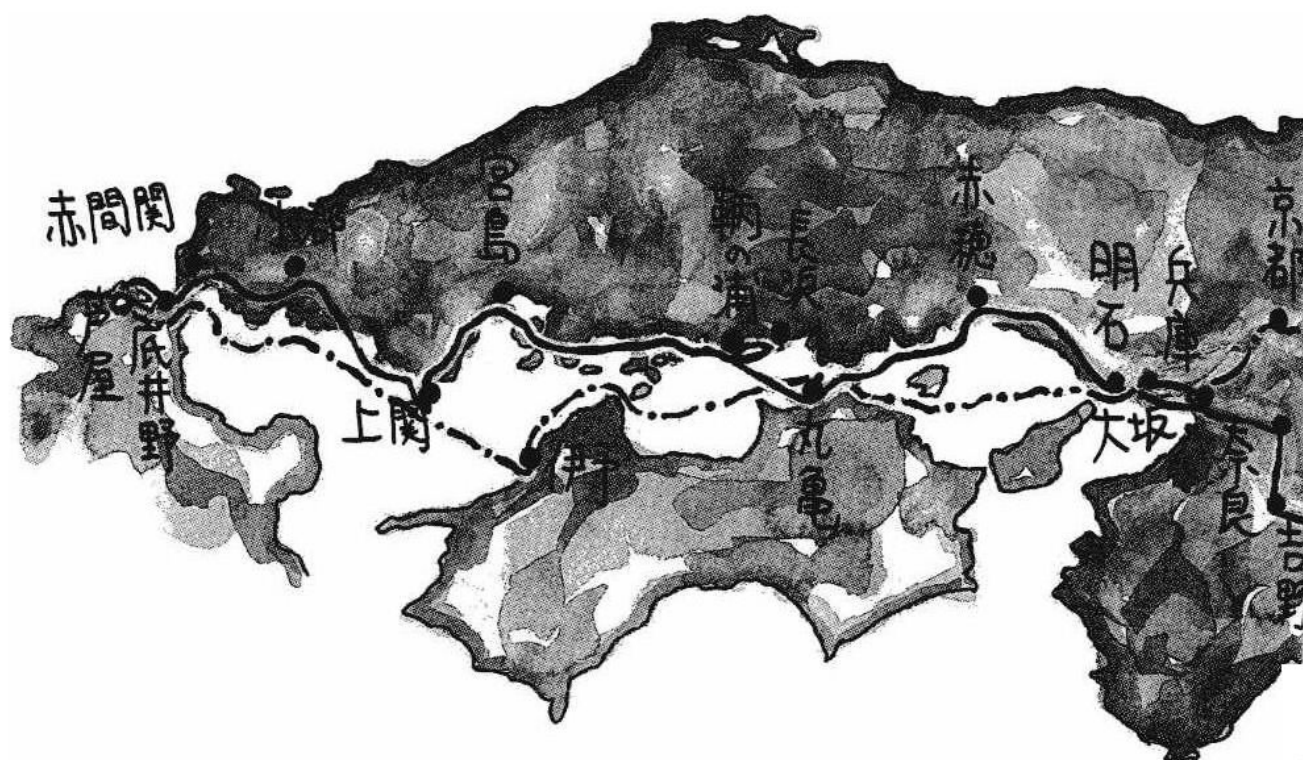
治まる御代は

水も濁らず……………270



秋葉みち・	
知らぬ山路に	
ゆきくれて……	305
水無月の空……	339
附……	432
あとがき……	444
文庫版附記……	448
参考文献一覧……	449
解説 道浦母都子……	455

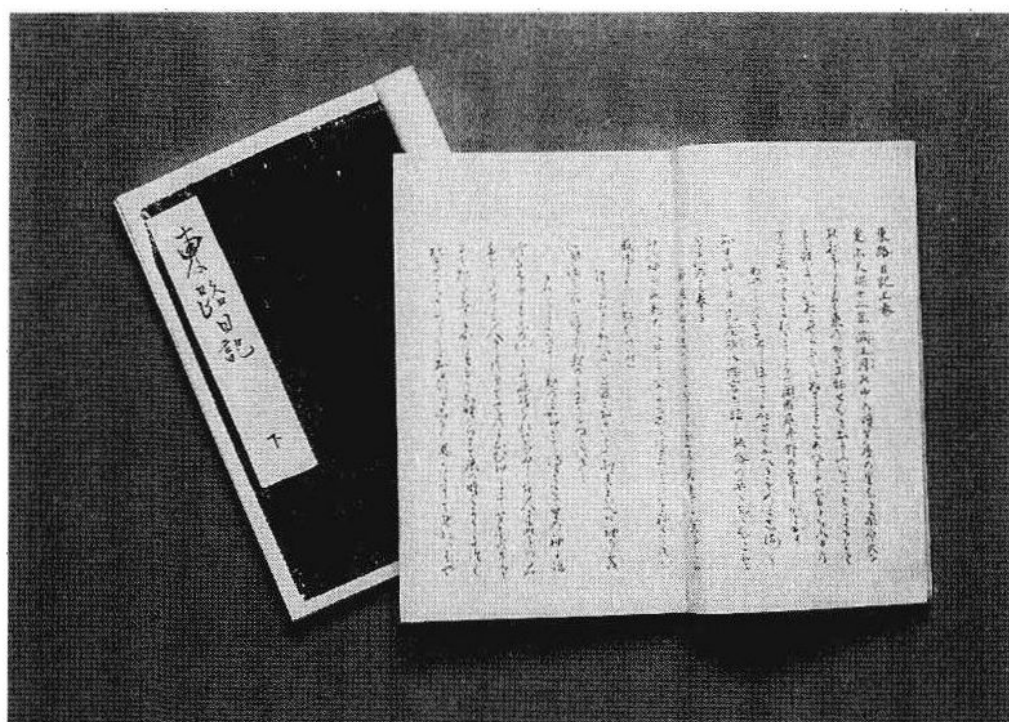
 所往路
 復路



地図作製・小暮満寿雄
撮影・石井康義

姥ざかり花の旅笠

小田宅子の「東路日記」



足も軽かれ 天気もよかれ

それは、こんな会話からはじまったであろうか。

「宅子さん、お伊勢詣りに行きまっしうや、拍子もない話のごとありますが、ほんなことで、旅は足腰たつうち。気の合う同士どしの旅や、よござすばい。来春らいはるあたりに……」

そういうのは、五十歳の主婦、桑原久子。つやつやした頬ほおに、口もとにこぼれる笑み、小太りでおちついた物腰、富裕な商家のお内儀かみさんの、威厳と貫禄があるが、同時に、表情にはのびやかな、やわらかい色があつて、普通ふつのお内儀さんにはみえない。

「え、どこ行かつしやると？」

と耳を疑うのは小田宅子。こちらは五十二歳、同じように商家の主婦だが、首すじつきりと色白の、若いときから小町娘といわれて村の盆踊り歌にまで歌われたという、つややかな風情は失せていない。麗人あたらは目尻の皺しわまで趣きありげにみえる。

「お伊勢詣りですたい。貴方あなたは前にも一度、東の旅へ行かつしやったが、あたいはまだこの年ではじめてで、ほかにも一人二人、「ウチも加かてて」ち、いいなさる女ひとがおらつしや

ります」

「昔の旅はもう遠々とおどおしい二十年も前のこと、まあ、女おんなばかりの旅、そりゃよござすなし。あたしも加かててやんなつせ」

「あ、あ、たがござるなあ、たいそう楽しゅうござつしょう」

ふたりは微笑しあう。それは天保十一年（一八四〇）のことだったろうか。

久子さんは寡婦かふだからいいが、宅子かさんの方は夫がいる。乞えばもちろん許すであろう寛容でやさしい夫であるけれど、まずは早いこと、夫の耳に入れなければ。

宅子さんはたちまち心うきうきと弾んでしまふ。

北九州は筑前、上底井野村かみそいの（現・福岡県中間市なかま）は、九州の幹線道路というべき長崎街道に合流する「中筋往還」にある。長崎街道は九州大名の参観さんかん交代の道でもあり、オランダ商館長も長崎奉行も通った。伊能忠敬いのだかが、大田南畝おんだんが往還した。

中筋往還の中間の要所である上底井野には代官所もあれば郡屋（郡役人の詰所）もあった。

またここには藩主黒田侯の別宅「御茶屋」もあった（長い歴史のうちには途中、廃されたり再建されたりという消長はあったが）。あたりの山容が美しく鷹狩に好ましい遊獵の地だった。大体が農村ではあるものの、上底井野村の道筋には商家が立ちならび、戸畑・若松・黒崎からの往来、交易が賑にぎわしい。その一角に、豪商「小松屋」（両替商）がある。

宅子さんはその家付き娘である。

宅子さんも入集している筑前歌人たちの歌集、『岡縣集』（おかのかたしゅう）にある作者畧歴（りやくれき）によれば、
「家ノ生業ハ商、頗ル福有リ」（すこぶ）（原典漢文）と。

そうでなければとてもものに、伊勢参宮の旅（しかも宅子さんらは善光寺・日光まで足をのばしている）は実現できないだろう。

宅子さんはこの旅を『東路日記』（あづまじにっき）という紀行文学に完成させ、久子さんは『二荒詣日記』（ふたらもうでにっき）としてまとめた。同行の女性二人が二人とも旅日記をものし、しかもそれが現存しているというのは稀有なことだが、そのどちらも品よく、挿入された歌も閑雅でおっとりしている。歌はやや宅子さんに才気があるかと思えるが、しかし実力は相伯仲する、というところだろう。

二人は当時、筑前地方の歌壇をリードした、国学者であり、歌人の、伊藤常足（つねたり）の門人なのである。

境遇もやや似ている。宅子さんは養嗣子（ようし）の夫清七を支えて家業にいそしみ、「家益富ム」とある。内助の功があったのであろう。宅子さんが十八歳のとき弟清七郎が生れたので、弟の成人後、家を譲り、すぐ横に新家を建ててそこへ引っ越し、醬油醸造業を始めたという。こちらの屋号も「小松屋」だった（これが墓誌にいう「二家ヲ為ス」であろう）

か。

姉弟仲もよく共に家業に精を出したらしい。神社仏閣への寄進も、必ず義兄の「清七義且」と「清七郎義広」の名が並べて刻まれている、と『小田家一族の系譜』にはある。

片や、久子さんはこれも芦屋の豪富〈米伝〉（質・両替商）の女あるじだった。悠々たる遠賀川は南から北へ流れて響灘に注ぐが、芦屋はその河口の町である。芦屋千軒と謳われ、遠賀川を挟んだ東の山鹿とともに、殷賑をきわめた商業の町だった。舟運の便を利用して物資も情報も集散し、財は文化を運ぶ。商人たちの間に学芸の素養が蓄積してゆくのは当然だろう。

久子さんが夫に死別したのは四十の年で、跡取りの栄次郎は十歳にもみたぬ幼さだった。久子さんは老いた舅を頼りにしつつ、家業にいそしみ、子育てをする。

「久子能ク家政ヲ整理シ家格ヲ墮サズ、郷党ニ令名有リ」（『岡縣集』作者畧歴）
その家は千坪を擁する豪邸だったという。

久子さんは息子が成年に達してからようやく閑暇を得、常足の指導を受けて歌を嗜んだ。浮世の責務を終えて肩の荷をおろしたとき、はじめて、

へお伊勢詣りに行きまっしょうや

と同門の親友を誘う気になったのであろう。

私は先年、ふとしたことから小田宅子の『東路日記』の原典コピーに接して、何と美しい本だろうと思った（作者本人の直筆かどうかは更なる研究をまたねばならないが、残された短冊などから見て、直筆のようでもある）。何度も清書したらしく、ひら仮名は手習いの手本のように流麗だ。漢字も美しく、書道を正規に学んだ人のものである（もちろん当時の知識人階層ならさもあるべきこと）。

近世筑前地方の文芸については前田淑先生のご研究でかなり知られるようになったが、中でも『東路日記』はこの地方では人気が高いとみえて、翻刻は容易に入手できた。更に前田先生のご本を読んでいると、この〈宅子さん〉のご子孫に、俳優の高倉健さんがいられるではないか。宅子さんの墓誌に、

「少クシテ容姿艶麗ニシテ和歌ヲ能クス、後、仏乗ニ帰シ善光寺ニ詣ヅ」

とあるように、美男美女系の家系なのであろう。高倉さんのご本、『あなたに褒められたくて』（93 集英社文庫）に前田先生からそのことを教えられたとある。

あるとき善光寺へ行ったら、何だか翌年も行きたくなり、毎年節分に行くようになった。顔を知られているので、人の寝静まる夜、粉雪の降りしきる中、お詣りすることにした。どんなに忙しいときでも。

「今年は忙しいからやめてしまおうか、と思うこともあったが、そう思うだけですでに気持ちが悪く、いたたまれない気がして、どんな無理をしても、信濃路を^{しなのじ}目指した。

なぜそこまで善光寺なのか。自分のこだわりが不思議であり、おかしくもあり、自分で自分の気持ちをはかりかねていた。

『そうか、そうだったのか』

前田淑先生の手紙を拝見しながら、ぼくはすべてを了解した。理屈ではなく、祖先の霊とぼくの魂とが呼び合っていたのかもしれない。宅子おばあさんとぼくが、善光寺を通して結ばれていたのだ」

そんなこともあるかもしれない。宅子さんは高倉さんの五代前の人である。

近年、江戸の女流文学のレベルの高さが見直されはじめ、研究成果も上りつつあるが、地方の才女たちに日が当りはじめたのは面白い。そしてまた、女たちの「旅日記」が発掘されてきたのも。

柴桂子氏の『近世おんな旅日記』（97 吉川弘文館刊）によれば、近世の女たちの旅日記は百数十点を算するという（むろん、まだまだ未発掘の史料も多いだろう）。大半が物語での旅だが、中には転封される武士の妻の旅日記や大名夫人の帰郷のそれもあって面白そうである。

なかでも私は〈宅子さん〉の旅に感興をとどめがたい。商家の妻女、それも五十すぎの女たちが五か月間、百四十四日、八百里の旅をし、ゆく先々の風光や事物をこまやかに

見て書きとどめ、殊にもおかしいのは（ここが女の旅たる所以だ）いたるところで土地の名物を買いてこんでいるところだ。

尤も男たちが講を組んでの伊勢参宮も、実態はショッピングツアーでもあったらしい。銭別の返礼や村中へのお土産もさりながら、

「平素地元では購入し難い品の購入もある。中には他人の買物を頼まれることもある」
 『中間市史』中巻 中間市史編纂委員会編 '92 中間市刊

旅先でそんなに買いこんでどうするのだろうと心配されるが、清河八郎の『西遊草』など見ると、現在の宅配便のような飛脚屋が、ちよつとした町にはあって、それに托したもののらしい。

それはともかく、全篇にあふれる古典教養のゆたかさ、語句の的確、歌のしらべの美しさはどうだろう。

彼女らが師と仰いだ伊藤常足というのはどんな人だったのであろう。私は寡聞にしてその名を知らなかった（底井野、という地名も）。

近世九州の歌人といえば大隈言道（一七九八—一八六八）がまず思い浮かぶ。彼の歌には新風がみなぎって面白いが、しかし弟子は少かった（野村望東尼が弟子の中では有名）。

「我は天保の民なれば天保の歌あるべし」

「我は市井の商人なれば商人の歌を詠まん、商人にして衣冠束帯せる公卿の歌を詠むは歌